The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	初級段階からの専門日本語教育の重要性とその実践への提言 : 研究留学生による専門紹介プレゼンテーション資料作成過程から
Author(s)	福良, 直子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67063
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　福良　直子　）	
論文題名	初級段階からの専門日本語教育の重要性とその実践への提言 ―研究留学生による専門紹介プレゼンテーション資料作成過程から―

論文内容の要旨

本研究は、大学院レベルの学習者に対する初級段階からのより効果的な専門日本語教育への提言を行うために、研究留学生の学習過程の一端を明らかにし、日本語初級後半段階からの専門日本語教育の重要性を主張するものである。具体的には、日本語能力が初級後半段階である研究留学生が自身の専門分野の内容を紹介するアカデミックプレゼンテーション（以下 AP）を完成させていく過程を詳細に観察する。発表原稿やスライドといった口頭発表資料を作成していく過程を、推敲時の学習者と教師の会話、教師へのインタビュー、学習成果物、および学習者の背景情報や学習に対する意識などに着目し、複合的に分析した。

第 1 章では、本研究の背景として、ますます多様化が進む留学生の傾向を示した。今後、大学院修了留学生の就職者の割合が高くなると予測され、日本社会において重要な役割を果たす存在となっていくことを指摘した。

第 2 章では、議論の前提として、専門日本語教育の定義と特徴についてまとめ、専門日本語教育研究の変遷を追った先行研究を基に、ある特定の学問分野の日本語論文などに現れる言語形式上の特徴から、学ぶ主体である学習者の動的なふるまいへと分析対象が大きく移行していることを確認した。専門日本語教育とは元来内容や文脈が優先されるものであり、言語能力の高低を基準に実施される、いわゆる「一般日本語教育」とは性質が異なる。しかし、日本語初級段階は言語が優先される傾向にあり、専門日本語教育の主な対象とはみなされてこなかった。これには従来の日本語教育学における学習観ならびに学習者観が関係していることを指摘した。つまり、第二言語習得研究におけるアイデンティティは、静的なものから動的なもの、変化し続けるものとして捉えられるようになっているにも関わらず、日本語教育学においては、学習者の固定化された、一面的な属性に焦点があてられてきたということである。

第 3 章では調査の概要として、調査対象であるクラスの概要、調査協力者の背景情報、およびデータの概要を示した。本研究の研究課題は、(1)プレゼンテーション資料の質的変化に対する教師の関与、(2)プレゼンテーション資料作成過程における学習者の貢献、(3)初級段階からの AP 活動とその教育の意義、以上の 3 点を明らかにすることである。

第 4 章では、本研究の研究課題(1)を示すべく、AP 資料推敲過程における、学習者と教師のやりとりを相互行為と捉えた上で、その中で行われた教師のフィードバック（以下 FB）を分析した。FB の対象は、「視覚資料」「論理展開」「専門内容」「言語表現」など多岐にわたっていた。教師は、問題点を指摘した上で、学習者のアカデミックな知識や経験を引き出しつつ、日本語能力に合わせた代替案や解決策を提示し、同時に学習者の意識化を促していることがわかった。また、内容を構造化された視覚資料や言語で表現するために、多角的な思考や分析が促されていた。このような適切な FB により、日本語による研究を行う基盤となる能力の獲得が促進され、本格的な研究活動へのソフトランディングが促されることが示唆された。

第 5 章では、研究課題(2)を示すために、AP 資料推敲過程における学習者のふるまいを行動と意識の面から分析し、その学習のミクロなプロセスの一端を示した。アカデミックな活動経験や専門知識に基づいた判断、多角的な推敲および成果物への反映など、主体的な存在としての取り組みに「研究者の卵」としてのアイデンティティがあらわれていた。しかし、聴衆の理解に対する意識の差から、教師による FB が成果物の改善に反映されないという問題や、聴衆への意識を構造化された言語表現に具現化することが困難であるという問題も存在した。以上により、AP が完成に至る過程には、学習者の AP の知識や経験、教師との相互行為、および学習者の意識が関係していることを指摘した。

第 6 章では、研究課題(3)について、学習者のインタビューデータの分析を基に論じた。学習者自身による AP 活動に対する自己評価から、聴衆の関心や理解に対する意識や気づきが明らかになった。さらに、その後の本格的な研究活動における AP 教育の意義を示すべく、2 名の協力者に対し追跡調査を実施した。「研究室における人間関係に対する内省」と「日本語能力と研究活動に対する内省」から、協力者が研究室というコミュニティに十全に参加していることが示唆された。また、AP 教育で学んだ構成や論理展開、および推敲を繰り返し、練習を重ねることの重要性について言及されており、AP 教育が研究室や学会での AP を行う上での原点となっていることが示された。

以上の議論をふまえ、初級段階からの専門日本語教育の重要性、すなわち日本語教育において専門的事項を発信のための内容として扱う意義を再考した。第 4 章で示した教師の関与は、学習者の日本語レベルや理解力を把握している日本語教員だからこそ適切に、かつ十全に行うことができるものであった。これはいわゆる「専門家集団」である研究室における指導とは全く異なるものと考えられる。研究室では、各構成員によって「研究室文化」が共有されており、例えば、専門用語を使用すればある程度ことばが省略されても内容が伝わる場であると言える。しかし、本研究が対象とした AP のように、「アカデミックな場」ではあるものの、同一分野の専門家集団ではない聴衆に対しては、専門用語の概念から説明する必要性が生じ、自明とされている前提を自明のものとはせず、再度その意味を掘り下げて思考することが求められる。さらに、聴衆は「専門家集団ではない人々」とは言え、大学院レベルで自身の専門領域があり、アカデミックな背景を持つ人々であるため、論理的かつ適切な説明が求められる。自身が有している専門知識を専門外の人々に言語化し説明するためには「相手が何を知らないのか」ということにまで意識を及ばせ、より適切な説明方法を探求する必要がある。すなわち、AP の学習の場が、日本語を通じて「コミュニケーションとは何か」を考え、学ぶ場となっていることを意味する。専門日本語教育としての AP 教育の真髄は、日本語能力の高低に関わらず、学習者が専門知識をよく知る expert として、アカデミックな知識や経験を活用し、能力を発揮できる教育にあった。これは、「専門家集団」の一員として、専門の内容を専門のことばで語らせるという意味ではない。本研究が提唱する専門日本語教育としての AP 教育とは、上述したように、学習者が自身にとっては自明である前提を掘り下げ、聴衆の理解を得るべく、多角的に思考、分析し、構成や表現方法を検討するなど、学習者自ら思考を深化させる能力を養う教育である。このような能力こそが、研究成果を上げその成果の発信が求められている研究留学生にとって必要とされるものであり、専門日本語教育によって涵養される「日本語による研究を行う基盤となる能力」であると言えよう。すなわち、専門日本語教育としての AP 教育は、AP の資料作成に必要な言語表現などの習得の促進に限らず、研究に対する姿勢や研究者を目指す者としての意識化を促す意義があるものと考えられる。また、第 4 章で述べたように、本研究が対象とした研究留学生はアカデミックな活動経験があるため、適切な FB を受ければ、初級後半段階であっても知識や経験を駆使する能力が十分に備わっている。そのため、初級後半段階という早い段階から「日本語による研究を行う基盤となる能力」が涵養されるものと考えられる。

これまでの議論を基に、初級後半段階からの AP 教育の有効性について論じ、実践への提言とする。上述したように、「専門家集団ではない人々の場」で専門用語の概念から説明することは高度なものであると考えられるが、逆の観点から捉えると日本語表現としては必ずしも高度である必要はないため、初級後半段階からの実践も可能であるものと考えられる。レポートや論文で求められるような厳密で詳細な日本語表現が使用できなくても、AP では視覚資料の活用により、専門的内容を伝えることが可能である。第 5 章で述べたように、調査協力者は日本語能力が初級後半段階であっても、卒業論文執筆や母国での AP の経験などアカデミックな活動経験を有しており、expert としてふるまうことができる素地があるものと言える。アカデミックな場面で要求される構成や論理性は、国や言語の違いを超えた普遍的なものであり、研究の目的や方法論など、共通した「アカデミックな枠組み」があるものと考えられる。既有の日本語が限られた段階であっても、このような枠組みが一定程度、共通して定まっているからこそ、AP の教育実践が可能となる。そして、そのような AP 教育によって、学習者は今後の研究活動において必須の専門用語や表現を学ぶなど、自分に必要なことを自分で判断し学んでいくと同時に、そのように判断するということについても日本語で学んでいく。このようなメタ的な学びは、上述の「日本語による研究を行う基盤となる能力」につながるものである。

また学習者は専門分野が多様であるが、大学院での学位取得という共通の目的を持ち、その目的達成のためには日本語を習得する必要や日本の社会、文化への適応が必要とされる。このような、同じアイデンティティを持った者同士が、協働してお互いの学習を進歩させ、日本語を使って相手にも認められる環境を準備できていたことが、成功への付加的な要因であると考えられる。さらに日本語能力が高まれば、初級後半段階で実施した AP と同じトピックで、より内容を高度にしたものを高度な日本語で行うことができるため、次の段階につながる発展性を含んだ教育実践であると言える。本研究が対象とした AP 活動は日本語クラスでの教師による個別指導であり、通常の一般的な日本語の授業とは異なる形態であるが、e ラーニングや反転授業など新たな教育実践への応用可能性も含んでいる。

最後に本研究の意義として、新規性ならびに研究方法の提案について述べる。日本語教育学分野において、APを含んだプレゼンテーション研究が数少ない中、本研究では学習そのものを包括的に捉える専門日本語教育の研究方法として、一定の成果を上げたものと言える。すなわち、本研究が示した専門日本語教育の枠内での学習者の捉え方について、一定の手法を試行し、総合的な記述により議論を行った。これらにより、学習者や学習者の変化、さらには教師や研究室、学習活動のリソースといった、学習者を取り巻く環境に関する記述を行うことの重要性が明らかになったものと言える。このような本研究の方法論が、今後の専門日本語教育研究の方法論に関する新たな議論の第一歩となることが期待される。さらに、本研究の方法論の妥当性によって今後も研究の発展に貢献できるものと考えられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　福良直子　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	村岡 貴子
	副 査	教授	岩根 久
	副 査	准教授	秦 かおり

論文審査の結果の要旨

本論文は、日本語能力が初級後半段階の大学院研究留学生の学習者によるアカデミック・プレゼンテーション（以下AP）の学習過程の一端を種々のデータ分析から明らかにし、従来ほとんど議論の対象とされていなかった初級後半レベルの学習者に対する効果的な専門日本語教育への提言を行ったものである。本論文のデータは、1) 9名の学習者が在籍する日本語クラスの中で各自の専門分野を紹介した成果物としてのプレゼンテーション用視覚資料、2) 発表原稿、3) 2名の授業担当教師と学習者との相互行為としての談話、4) 教師と学習者の各々へのインタビューから得られたもので、効果検証のための追跡調査を行った2名のコース修了者へのインタビューデータも含む。以上のデータをもとにした研究課題は、(1)プレゼンテーション資料の質的変化に対する教師の関与、(2)プレゼンテーション資料作成過程への学習者の貢献、(3)初級段階からのAP活動とその教育の意義の3点を掲げている。

本論文の特に評価すべき点は、以下に説明するように、テーマの独創性、データの新規性、および個々のデータを丹念に分析した記述にあると言える。本論文において、大学院レベルの専門分野の知識と技能を有する学習者の場合には、専門日本語教育は十分に可能であると主張し、従来、中級か上級以上の能力を獲得した後にのみ当該教育が可能として研究が遅れていた背景に切り込む。本論文では、日本語能力が低いnoviceと言える学習者であっても、既に研究室の構成員として、専門分野の知識を駆使してexpertとして十分にふるまえる存在として、教師との相互行為の中で描かれている。教師は、視覚資料のスライドや発表原稿における不明な点や論理展開について質問し、学習者はそれらにexpertとして答えつつ推敲作業を重ね成果物の完成度を高めている。つまり、教師はその分野のnoviceとして、一方的に教えられる側であった学生にexpertとして振る舞える機会を供与し、それが教師とのある種対等な（むしろ学生が教える）関係性を生み出すことや、その関係性によって二者間により多くの相互行為が生じ、学生への「より自発的な日本語発話」の促進を可能にした過程を示した記述は、本論文の真骨頂である。

このように、まもなく本格的な研究コミュニティに参入する学習者は、AP活動におけるデータの取捨選択の判断を行い、専門的な内容の論理展開を複数回にわたって検討して改善し、さらには、専門分野の異なる聴衆の既有知識や視覚上の工夫を行う等、聴衆への配慮を行うことによって、自ら狭義の言語能力の不足を補い、確実にプレゼンテーションの質的向上を達成していく存在であることを、本論文は、多様な事例と、学習者の意識の丁寧な記述によって示している。以上の通り、本論文は、日本語のAP活動に資する研究としてはあまり見られない相互行為としての談話やインタビューのデータを質的に考察し、日本語能力の高低や学習者の専門性の観点から専門日本語教育の新たな可能性を明快に提言し、研究の射程範囲の拡大に貢献した。そこでは、さらに、日本社会での社会人としての活躍を促す人材育成につながるといった将来を見据えている点等、著者の広い視野が披露されている。

本論文は、主として質的アプローチを用い、研究に対する十分な背景記述、分析、それらを丁寧に総合した手堅い構成により、学術的で、かつ明快な文章で構成され、また、こうした方法論の選択が本研究の成功の証左であるとも言える。ただし、異なる母語母文化を有する各学習者のアイデンティティには、学習経験も含め文化的規範の影響が及ぶ可能性も無視できず、また、欲を言えば、コース修了生に加え、指導教員の評価も調査できれば、一層論文の質を高めたと推測されるが、それらは本論文の価値を損なうものでは全くなく、今後の研究に強く期待するところである。以上のことから、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを終えていることを申し添えます。